現代のことば

小原（こはら） 克博（かつひろ）

世界平和の足場はどこに

八月三～四日、比叡山宗教サミットに出かけてきた。今年、二十周年を迎えるこのサミットには国内外の宗教代表者が多数参加しており、その顔ぶれを見るだけでも楽しい「お祭り」的な要素もある。いずれにせよ、宗教や宗派の違いを超えて、平和のために祈り、平和のメッセージを世界に伝えるという働きを二十年間続けてきたことは貴重な財産であると言えよう。

ヒエイザンの名が平和メッセージの発信地として、ヒロシマ、ナガサキと共に世界に知られていくなら、それは日本の国際貢献の一つになるだろう。しかし同時に、この節目のとき、比叡山宗教サミットに象徴される宗教者会議が抱える課題にも目を向ける必要があるように思う。

ヒロシマ、ナガサキは、あえてカタカナで記しても違和感がないほどに、国際的な認知度の高い地名である。私がドイツに留学していた頃、街角で大学生たちがヒロシマ、ナガサキの名をあげながら核兵器廃絶運動を行っているのに何度も出くわしたことがある。当の学生たちにとって、これら日本の地名は身近なものではないはずである。しかし、異国のその地名は、反核平和の強力な「象徴」となって、ドイツ人学生の心をとらえていたように見えた。

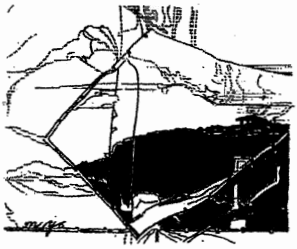
ヒロシマを多少なりとも知っている人間として、最初、ドイツでその名が用いられているのを見て、狼狽したことを覚えている。広島で被爆した私の祖父は、晩年を「語り部」として生きた。祖父の経験を聞きながら、それを理解したり、引き継ぐことの困難さを幾度となく感じた。しかし、そのヒロシマがドイツの学生によって、ためらいもなく大胆にアピールされていた。

その時感じた狼狽を、今は多少整理して受けとめることができる。ヒロシマ、ナガサキの名が、国境を超え、世代を超えて、反核平和のメッセンジャーの役割を果たしている。新しい理解者、運動の担い手を生み出している。この事実にこそ狼狽すべきであったのだ。

ここで話を比叡山に戻そう。比叡山がヒエイザンになるための課題は何か。それは、国際的な発信力が十分でない、とか、まだ十分な歴史がない、という問題ではない。担い手の問題である。

海外の各界から著名人を招き、山の上で祈りを合わせ、平和のメッセージを世界に発することは大切である。しかし、山の下で、つまり、日常的な生活の場で、そのメッセージを育み、担うべき人々の頭上を飛び越えて世界平和が喧伝されているとするなら、比叡山が、異国の地でヒエイザンとして語られる日はまだ遠い。

平和とは何かを具体的に、そして世代をまたいで考える重要な過渡期に日本はさしかかっている。このような状況の中で、日本社会、とりわけ若者に対し、良質の知的刺激と指針を与えるような活動を宗教界が率先して行うことができれば、それこそが世界に対し平和構築の模範を示すことになるのではなかろうか。「世界」を視野に入れつつも、平和の足場を固めることが急務である。



中野　庸二

（同志社大教授・キリスト教思想）